

III-9 小児鼠径ヘルニアに対する腹腔鏡下経皮的腹膜外ヘルニア閉鎖術施行症例の検討

○木村 俊郎 須貝 道博 石戸 圭之輔 小林 完  
齋藤 傑 三橋 佑人 袴田健一  
(弘前大学医学部附属病院 小児外科<sup>1</sup>)

【背景】小児鼠径ヘルニアは小児外科領域で最も頻度の高い疾患であり、手術方法として Potts 法などの simple herniorrhaphy が標準術式として優れた成績を残している。近年腹腔鏡下経皮的腹膜外ヘルニア閉鎖術(LPEC)が多くの施設で採用されており、当施設では 2007 年より同術式を採用している。腹腔鏡を使用した場合、術創の整容性に優れているだけでなく、術中の検索により対側腹膜鞘状突起開存(CPPV)を確認することができ、術後の対側鼠径ヘルニアの発症を予防するのに有効であるとされている。当施設では、術中所見で内鼠径輪の径が 4mm 以上、またはヘルニア門から鉗子が 1.5 cm 以上挿入可能であった症例を腹膜鞘状突起開存と診断し、LPEC を追加する方針としていた。LPEC と従来法の手術症例を検討し、その現状と今後の課題について考察した。  
【対象と方法】当施設で小児鼠径ヘルニアに対し LPEC にて手術を施行した 400 例と、Potts 法にて手術を施行した 399 例を対象とし、LPEC と従来法を比較して利点および問題点を検討した。【結果】LPEC の症例において術前に片側鼠径ヘルニアと診断されていた 377 例中 125 例(31.3%)が術中所見で CPPV 陽性の診断となり LPEC が追加で施行された。術後の再発に関しては、従来法では 399 例中 8 例で、LPEC 法では 400 例中 4 例で認められた( $p=0.453$ )。術後の対側発症に関しては、従来法では 399 例中 38 例(10.4%)で、LPEC では 400 例中 4 例(1.7%)で認められ、LPEC が従来法より対側発症率を有意に低下させようという結果となった( $p<0.0001$ )。【結論】小児鼠径ヘルニアに対する LPEC は、従来法に比べて鼠径ヘルニアの対側発症率を有意に低下させた。患児の再手術の危険性を低減することができるという点で、LPEC の有用性は非常に高いと考えられた。

III-11 潰瘍性大腸炎術後短期成績と長期肛門機能から見た治療戦略の構築

○小笠原 紘志 坂本 義之 諸橋 一 三浦卓也  
神 寛之 佐藤 健太郎 袴田 健一  
(弘前大・院医・消化器外科学)

III-10 血液透析患者 (HDP) における血中および毛髪中濃度からみた微量金属量の考察

○山谷金光<sup>1</sup>、坪井滋<sup>1</sup>、葛谷知佳子<sup>1</sup>、米山美穂子<sup>1</sup>、  
佐藤美沙季<sup>1</sup>、齋藤久夫<sup>1</sup>、畠山真吾<sup>2</sup>、大山力<sup>2</sup>、  
舟生富寿<sup>1</sup>

(鷹揚郷腎研究所弘前病院<sup>1</sup> 弘前大・院医・泌尿器科学<sup>2</sup>)